

Nadeshiko-no-kai Report

東京学芸大学附属小学校 ● 同窓会

撫子の会

会報 17 号

小学校はエンピツの匂い

会長挨拶

「制服の思い出」

「撫子の会」会長 佐々 智樹

撫子の会会員の皆様には益々ご清祥の事、心からお慶び申し上げます。平素は撫子の会運営にご協力頂き役員一同を代表してこの場をかりて御礼申し上げます。皆様のご協力で第十七号会報をここにお届けする事が出来ました。伝統ある豊島・追分・小金井三校の同窓会「撫子の会」として発足して既に二十年以上が経ちました。附属小学校として同じ撫子を校章とする三校の同窓生の交流の場として少しずつですが卒業生同士の親睦を計る機会を設け、小金井小学校が伝統のある優れた教育環境を維持出来るように同窓生が力を合わせた支援活動を繰り広げて参りました。母校が更に発展して行くために皆様のご協力をお願いする次第です。

前号で私が豊島小学校の校歌の旋律は歌詞が変わったけれども脈々と今日まで唄い続けられていると書きましたところ、大変多くの反響を頂きました。その中で豊島から小金井

に移って来た生徒が知らなかったことがいくつありました。その一つは、豊島・追分が廃校になる前に既に開校していた小金井小学校に独自の校歌があり、豊島・追分と統合されるまでの間だけ唄われていたということです。短い期間であったためにその存在がすっかり忘れ去られていたようです。

小金井に四年間だけ唄われていた校歌があつたという話が理事会で話題になると、実は制服も同じような興味のある変遷があつたことが分かりました。それは、小金井小学校には豊島・追分と統合するまで小金井小学校独自の制服があつたことです。この制服は追分小学校の流れを汲んだデザインであつたようですが、男子の制服は統合後に豊島小学校の制服が採用され、女子は小金井オリジナルが存続となったそうです。従って、数年間は小金井、豊島、そして追分の制服が小金井小学校で混在していた時期がありました。

さて、私が小学校の時代は学校の制服は登校でなくても出かけるときはことあるごとに着ていました。結婚式、法事、家族旅行などなど、いつも制服を着ていたことを思い出します。戦争が終わり、少し世の中が落ち着いていた時代ではありましたが、着るものなどに贅沢は出来なかつた時代なのでしょう、夏・冬

の制服を持っていてだけで十分贅沢だったのだと思います。

小学校二年の冬の深夜に家の近くで大
火事がありました。もしかしたら自宅に
延焼するのではないかと家族が大騒ぎに
なっている時、祖母が私の小学校の制服
とランドセル一式を寝室に持って来て早
く着るようにと促しました。私は言われ
る通り着替えてランドセルをしょって茶
の間に行くとい火事は下火になり避難しな
くて良くなりました。その時の私の姿を
見つけた兄弟達が「お前こんな時間に学
校か？」と大笑いになったことがありま
した。祖母は私の豊島小学校入学を一番
喜んでくれた人でした。

今年の三月に新しい「撫子の会」会員
になる小学校の卒業生の門出を祝うため
に卒業式に参列させて頂きました。生徒
全員が伝統の制服に身を包んだ、規律正
しい厳格な式に立ち会うことが出来て百
年を越える伝統を持つ学校の重みを改め
て感じた次第です。三校合わせた卒業生
は間もなく一万六千人になろうとしてい
ます。

特別企画 ● 時代とともに

制服の話

制服の変遷

創立記念誌等を調べてみると意外に「制服」
に関する記載が少ないことに気が付きます。同
窓生の皆さんが保管されている当時の写真をお
借りして分析してみると、豊島・追分・小金井
にそれぞれの制服があったことがわかります。
写真上は豊島小学校、下は追分小学校の男子・
女子の制服。



豊島男子は折り襟で、現在の小金井小男子の
制服とほぼ同じであることがわかります。一
方、小金井女子は追分女子の制服を継承したよ
うで豊島の女子とは夏服冬服ともに異なって
います。

創立八十年記念誌の中に鷲山重雄先生が寄稿
された「豊島師範附属小から学大校小金井小へ
の足あと」という文章があり、豊島小が小金井
に移転するにあたって、父兄から学芸大学に要
望書が提出されており、その中に以下のくだり
があります。

・制服、制帽等はそのまま継承すること（男
女ともに）。

・校歌の継承（曲は変えないが歌詞の一部の
改訂は、土地が変わるので止むを得ない）。
この要望書を基に統合が進められましたが、
どこかの段階で調整がなされ、現在に至ったと
推定されます。

小金井ネイティブ第一号は、昭和三十四年四
月入学。このときは、小金井独自の制服と校歌
があったわけです（三頁写真参照）。小金井卒
第一期（昭和三十九年卒）は、豊島師範附属か
ら昭和三十八年四月に転入されてきた方々で、
そのため三頁の写真にあるように制服が混在し
ていた時代もあったようです。小金井独自の制
服と校歌は四年間だけだったわけです。



男子：写真上段左は豊島制服、右は豊島・追分混在（昭和39年卒業式）
 男子：写真下段左は小金井制服（昭和37年頃）、右は小金井も豊島も同じとなる
 女子：写真上段は豊島女子の冬服、写真下段は豊島女子の夏服

校歌の話

もう一つの

「学校の歌」のこと

小金井昭和四十一年卒 新藤 直子

こうして、「制服」「校歌」の変遷を見ていくだけでも豊島・追分・小金井がそれぞれの伝統を合わせ継承していったことがよくわかります。統合に携わった方々のご苦労に敬意を表さざるを得ません。創立六十年記念誌には、大場晃先生が「雑感制服」という題で寄稿されており、熱血漢先生の繊細な一面を覗かせる詩的な表現がとても印象的です。一部転載いたします。

「春、紺の制服を着て、ダブダブは一年生。体の表皮の一部となっているのは六年生。子どもとかくれんぼしたら、顔をかくして後ろを向かされた。後ろ姿では名がわからない。」
 このあとに一年の変化を綴り、以下の文章へと続く。
 「紺の制服にもどるころには、一年生の服もすっかり身につき、六年生の服は大きくなった体をしめつけている。
 すばらしきかな、小学校生活。」

私が小金井小学校に入学したのは、昭和三十五年四月、早いものであれからも五十六年も経つのですね。当時は、まだ開校二年目の新しい学校で、上級生はすぐ上の二年生しかいませんでしたし、学年も二クラスしかなかったので、生徒と父兄、先生方の距離がとて近くて家庭的な雰囲気だったので心に残っています。校庭は、まだ土のまま、草ぼうぼうでヒバリの巣があつたりして、幼い私たちは秘密基地や宝探しをして本当に楽しく遊んだものでした。授業開始のチャイムもなくて、先生が時間を忘れている私たちを呼びに来られたこともありました。
 そんな頃、全校職員や父兄に向けて「学校の歌」の歌詞公募があつたのだそうです。母の言葉によれば、「まだ学校ができたばかりで校歌もないので、正式の校歌ができるまで

1. 学校のうた

新 藤 あ や 作 詞
飯 田 秀 一 作 曲

♩ = 112 ~ 116
mf

1. あ お く ひ ろ が る そ ら の し た も
2. き び し い ふ ゆ の に さ さ わ さ や か に
3. あ さ ひ の よ う に さ さ わ さ や か に

ふ じ も は る か み え て い る で
あ つ い も な は つ に か も ま げ が け な ら か

む さ し の は ら の に が ね い に た
や さ し く か お る な で し こ は う
た た し い こ ろ そ た て よ う

か ぐ ぞ び え る ま な び や る よ
こ ろ の の 赤 し な わ か の し ま

で わ れ ら の ふ ぜ く は う が っ ぐ

「青くひろがる 空の下
富士もはるか 見えている
むさしの原の
小金井に
高くそびえる まなびやよ

「きびしい冬の 寒さにも
暑い夏にも まけないで
やさしくかある
なでしこは
心のおしえ わがしるし

三、朝日のように さわやかに
青空にて ほがらかに
正しい心 育てよう
未来をになう その日まで
われらの ふぞく小学校

皆で歌える歌を」という呼びかけであったらしい。炬燵で母がいろいろ考えては、どうかしらと父に見てもらっていたのをかすかに覚えていてます。両親の時代は、校歌といえど文語体の厳めしいものが多かったけれど、「できたばかりの新しい小学校だから、すべて口語体にしたくて苦労したのよ」「二番の撫子が優しく香るところが好き」と母がよく話していました。経過はよくわかりませんが、たまたま母が応募したこの歌詞が採用され、音楽の飯田秀一先生の作曲で、今の校歌ができた

るまでの三年間だけ歌われた「学校のうた」が誕生しました。

その後、私が四年生になるとき豊島小学校との合併があり、小さな学校は少し都会の匂いのする沢山の同級生・上級生を迎え大きく成長することになったのです。

「学校のうた」は小金井小での役割を終え、我が家の愛唱歌のひとつになっていきました。が、みんなの記憶からはいつか消えてなくなってしまうのかなと少し寂しく思っていたところ、川田副会長が古い「なでしこ」の冊

子から楽譜と歌詞を探し出して下さいました。さらにその後、小金井の同期会で当時の同級生数名でこの歌を歌う機会があり、その時かつて豊島小から移ってきた同期生が、「初めて聞いたけれどいい歌だね」と言ってくれました。さりげないその一言がなぜかしみじみ嬉しく、このもう一つの学校の歌が小金井小の歴史の中でほんのひと時でも暖かい居場所を得たように思いました。

今回このようなお話を記録に残す機会をいただき、亡き母とともに心から感謝しております。そして、これからも一人一人の中にある小さな歴史や思いを大切に、小金井小がすべての卒業生の心の故郷としてますます発展することを願っています。



回想

豊島小高等科昭和十二年卒 森 秀夫

戦前の豊島小（通称）は尋常科（国民学校時代は初等科）六年、高等科二年の八学年で編制されており、私は昭和十年に高等科に入學し十二年に卒業しました。大正十一年生まれで今からおよそ八十年ほど前のことです。一緒に卒業し全員が師範本校に進学した三十三名は互いに忘れられない友ですが現在は数名になつてしまいました。

さて、学校の朝は小使い（用務員）さんが校庭に向けてカチカチと打つ拍子木の響きと、それを待ちかねていたように流れる音楽で始まります。朝礼では校歌のほか明治天皇御製をオルガンの伴奏で奉唱しました。

二ヶ年にわたる学級担任の杉山勝栄（かつてい）先生は若々しくも温情豊かな素晴らしい先生でした。杉山先生の作詞、音楽の上野先生の作曲で学級歌がつけられ、それは

「ああ豊島 第一豊島 大なる理想の 伸びゆくところ・・・」に始まり、全員で高らかに歌いました。

「伸びよ」

というのが級訓です。

杉山先生は私たちの卒業後に学習院初等科に転じられ、やがて初等科長として、現皇太子さま、現秋篠宮さまの教育に当たられました。ご退職後の昭和五十二年八月、六十九歳でなくなられたことを、新聞各紙の訃報記事で知り、謹んで告別式に参列しました。

高等科の授業は尋常科に加えて英語、農業、商業、珠算などがあり、ほかにも本校の先生や各科目を専攻研究されている豊島小の先生による授業がありました。柔道または剣道、それに蹴球の時間というのも特別にありました。

入学前年の昭和九年には鶴原に至楽荘、在学中の十一年には東久留米に成美荘が出来、ここでの学習も活発でした。また、学期に何回か剛健遠足というのがあり、学年別に学校から歩いて各所を訪ねました。高等科は一、二年合同で赤坂の乃木神社、湯島聖堂、淀橋浄水場などに行きました。一月には一週間ほど柔道と剣道に分かれて寒稽古が行われ、期間中の毎朝始業前に三十分ほど致しました。家からの通学も含めて朝の寒さは相当なものです。

戦後の教育改革で昭和二十二年に豊島小の高等科は無くなり、新たに現在の附属小金井中学校が創られました。その際、中学校の一年生三学級のうちA組とB組は本校が移転した小金井の校地に、C組は池袋の豊島小内に置かれ、この状態は三十二年に小金井に統合するまで十年間続きました。

ところで私はその附属小金井中学校創立の翌年の昭和二十三年に同校に教員として勤務することとなり、以来昭和六十年まで三十七年間在職しました。附属中学の一期生をはじめとしてここでお会いした豊島小、小金井小出身の皆さんは少なくないと思います。また後年、私が講じていた大学のうち、某校での出合いの学部長が豊島小出身の方で往時の思いをともにしました。

（平成二十八年一月二十日記）

〔追記〕

豊島小高等科卒業生全体の会が伊藤一郎氏（昭和十年卒、元豊島小教員）を代表世話人として平成六年につくられ、紫空会と名付けて毎年池袋で盛会でしたが、高齢化に伴い平成十六年に解散しました。

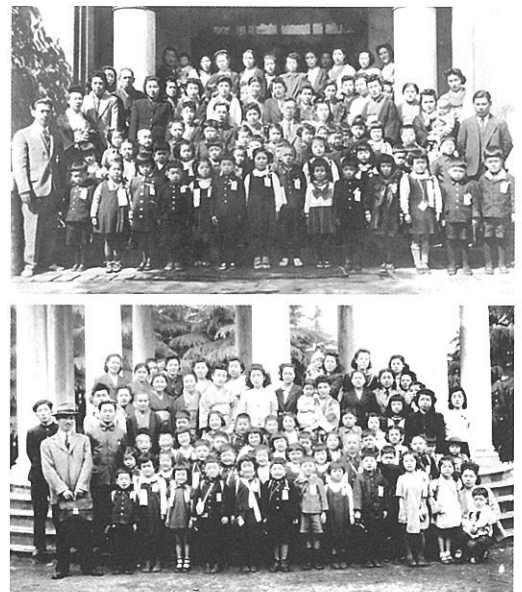
恵まれていた

豊島小学校の

思い出

豊島昭和三十年卒 大島 昭三

戦後も七十年以上経ち、「豊島小学校」が小金井に移転してからも既に半世紀以上過ぎました。今は池袋駅西口前の僅かな植え込みの中に「碑」(写真)が残るのみで、現在は「東京芸術劇場」や歓楽街になって仕舞った場所に、「我が母校」豊島小学校の立派な校舎は建っていません。その門を私が最初にくぐったのは戦後間もない昭和二十四年の四月でした。当時は「東京第二師範学校附属豊島小学



校」が正式な校名でした。

また今では考えられないことですが、当時は校舎に入る玄関が「先生用」と「生徒用」は全く別々で、子供心にも「先生は偉いのだな・・・」と心底思っていました(右の写真上は、その先生用の玄関で、入学式当日に撮ったもの。写真下は最初の遠足「豊島園」。以来、六年間、あの戦後の混乱期の中では非常に恵まれていた豊島小学校に通った思い出を少し綴ってみました)。

小学校の在った「西口」側は、(映画館や大きな書店等もあり、文化的で明るい感じだった「東口」側と大きく異なり)今では文字にするのが憚られるような「闇市」のルツボでした。その真ん中を通る細い道を小学生が

通うのは、今では考えられないほど「悪い環境」でしたが、それにもかかわらず、学童事故も無く、誰一人として不良化することもなかったのは、ひとえに当時の先生方の並々ならぬ傳育のお陰であったと感謝の念でいっぱいです。それは正に校歌に歌われている『...教えの親の培いに...』そのものでした。

入学当初の校長先生は確か黒澤先生と言います。ちよつと近付き難い雰囲気の方でしたが、二年生か三年生の時には佐藤卯吉先生に代わりました。佐藤先生は剣道の達人であられ、我々が三年生か四年生の頃にやつと出来た「体育館兼講堂」で、「真剣」による模範演技を生徒達に見せて下さったのを鮮明に覚えています。先生はいつも朝礼台(二本の大きなヒマラヤ杉の下の台)に出て居られて、ニコニコと子供達を見守って下さっている、毅然とした風格と優しさを兼ね備えた素晴らしい校長先生でした。

豊島小学校は六年間クラス替えがなく、一、二、三年生までの伊藤一郎先生、四、五、六年生までの相原永一先生のもと、四十数名のクラスメイトは本当に兄弟のような仲で、思い出深い六年間を過ごしました。そのため、我々「二組」は卒業後のまとまりが抜群で、高校生の頃から「クラス会」を母校の教室の中で屢々



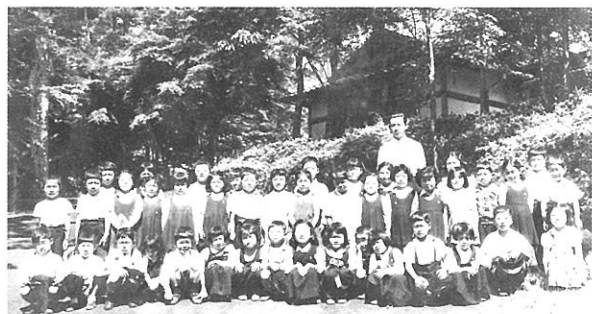
開いていました（右の写真上）。そのクラス会は卒業後六十年以上経った今でも毎年続いています（写真下は平成二十七年のクラス会）。

戦後間もない一、二年生の頃のことですが、周囲一面、戦災の焼け野原の中で、立派な校舎が残っただけでも奇跡的なことでしたから、学校には暖房設備は全く無く、真冬でも教室には大きな火鉢が一つあるだけでした。気候も今より遙かに寒かったので、冬はみんな、耳たぶや指先は「しもやけ」で真っ赤でした。勿論、「学校給食」などなく、僅かなおかずの入った麦入り飯の「日の丸弁当」の弁当箱を火鉢の隅に乗せて温めたことを懐かしく思い出します。

また校舎のあちこちには戦災の傷跡が多く残り、体育館ありませんでしたが、当時としては珍しく立派なプールがありました。

三年生の頃になって「学校給食」が始まりましたが、飲物は当時の進駐軍（米軍）放出の「脱脂粉乳」と言うもので、薄紫色の沈殿物が大量に入っている、それはそれは不味いミルクでしたし、主食はコッペパン、それに一菜のおかずで、今の学校給食とは質的に大きな隔たりがあるものでした。それでも「飢え」と隣り合わせだった多くの戦災孤児の方々からみれば、「衣、食、住」が何とか事足りていた我々附属小学校の生徒は本当に恵まれた家庭の子ども達でした。

まだまだ書き残したい「戦後の想い出」は山ほどありますが、最後に触れておきたいのは、我々が何にもまして恵まれていた校外生活の事です。それは、一年生から春秋二回ほど行われた「成美荘」での農業体験（中段写



真）、四年生からの箱根「一字荘」での

林間学校（下段写真右）、五年生からの千葉県鶴原「至楽荘」（下段写真左）での海浜学校、そして卒業式の翌日に出発した修学旅行でした。多分、どれも当時の区立小学校ではありえないことだったでしょうが、東海道線に乗って、三泊四日（二泊三日だったかな？）で伊勢・志摩巡りをさせてもらった修学旅行はその最たるものでした。佐藤卯吉校長先生も同行され、生まれて初めて、伊勢神宮にお参りし、鳥羽で御木本幸吉翁の真珠工場と、志摩半島・英虞湾で真珠養殖の筏を



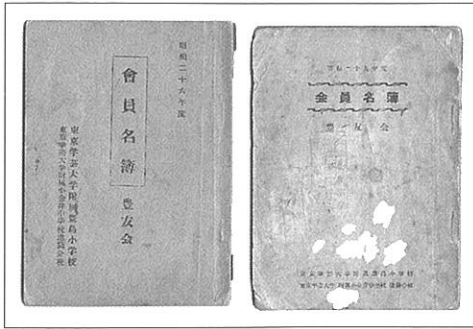
見学したのを鮮明に覚えています。

また当時は米の収穫が足らず、お米は「配給制」でした。その為、このような宿泊旅行にも生徒は一人一人、布袋に入れたお米を持参して、宿での食事に供したのも、隔世の感があります。

このような半世紀以上前のことを思い出すにつけても、現在の幸せを噛みしめ、飽食を大いに反省しなければいけないと痛切に思う次第です。

尚、私は昭和二十六年と二十九年の全校の名簿、「会員名簿 豊友会」を各一冊、手元に残してあります（写真）。

ご希望の方には必要頁をコピーして差し上げますので左記によりご連絡下さい。



電子メール：BXZ00061@nifty.com

電話：03-3953-6452

手紙：〒161-0033

新宿区下落合2-20-2

母校から・先生から

海を渡った

絵画の里帰り

展示企画に

ついて

副校長 関田 義博

平成二十二年の夏、アメリカのミシシッピ州にあるコットンランディア博物館というところから、「附属小学校を卒業した児童十六名が描いた絵画が発見されたので、ぜひ展示したい。」という旨のメールが届きました。そこで私は、十六名の方々の現住所を探し、うち七名の方と連絡を取り合うことができました。最も高齢の方は八十才ぐらいだったと思われます。七名の方からは小学校時代のお写真を拝借し、画像をデータにしたものを博物館へ送りました。絵画がご縁で、多くの卒業生と交流を深め、昔の話をうかがうこともできました。それから五年が経過した昨年の秋、東京新聞の記者をしている

藤川大樹さんから、次のような連絡が入りました。

「国際交流基金から『日米草の根交流コーデイネーター』として米ミシシッピ州に派遣されている岩田千江子さんが、同州内のデルタ博物館で、東京学芸大学附属小金井小学校の児童が一九五一年に描いた絵画作品を見つけてきました。絵画の数は十六点で、保存状態は良く、絵の裏には児童の名前と学年、題名が書かれているそうです。戦後間もない時期に日米の美術教師が平和を希求し、子どもたちの絵画の交換を企画したそうです。このほど岩田さんから、知人である弊社の外報部長宛に『この子どもたちの絵画を日本で展示できないか』と相談があり、東京学芸大学に協力をお願いした次第です。現在、弊社の事業局にも財政支援を含め、協力をお願いしています。もしも展示会が実現した場合は、記事にして掲載する予定です。」

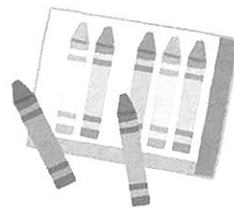
藤川さんとは、今年の春に二回お会いしました。一緒に本学の図書館へ行き、絵画の展示が可能かどうか打診もしました。昨年度の図書館長だった藤井健志教授からは、展示に向けての前向きな回答をいただくこともできました。今回発見された絵画の作者は、コットンランディア博物館で発見されたものと

すべて一致していました。もしかすると、五年の間に、絵画がコットンランディア博物館からデルタ博物館へ移動したことも考えられます。

絵画の展示に向けた課題は、次の二点です。一つは、展示会場をどこにするかです。附属小金井小学校は、セキュリティの問題から展示会場にするのは難しく、できれば本学附属図書館を会場にできればと考えています。二つめは、展示にかかる費用をどうするかです。絵画の輸送費、額縁のレンタル料、絵画を展示するための間仕切りのレンタル料、展示を告知するポスター、

キャプション・パネル等の作成費、会場設営にかかる人件費等、まちがいに多くの費用がかかります。

十六枚のうち二枚の絵画については、データが送られてきています。一枚が昭和三十年卒の小林千郎さん（写真下）、もう一枚が三十一年卒の大塚浩史さん（写真上）が描かれたものです。発見された絵画からは、平和を享受する子ども



たちの喜びに満ちた思いが強く感じられることと思われまます。絵画の展示に向けて私にできることは限られています。できれば多くの皆様のお力添えをいただきながら、今後も尽力したいと存じます。どうぞよろしくお願ひ致します。

「同期会」報告

プチ同期会@ 吉祥寺の 卓球居酒屋

卓球居酒屋

小金井昭和五十八年卒 吉田 朋弘

人生も折り返し地点を過ぎた四十五歳、節目っぽいということ、なにより海外在住の同級生が二人も一時帰国するということがあって、去る三月二十六日、中学同期も含めたプチ同期会（昭和五十八年卒）が開催されました。

招集は年代相応に「中年のSNS」とも揶揄される、Facebookを使用。FBに参加している同期しか声をかけられないことから、「プチ」と銘打ったようです。

フタを開けてみれば、六年四組の担任だった小林道正先生を含め、参加者は総勢三十余名。プラスお子さんが数名（うち一人は生まれて間もない赤ちゃん。かわいい！）と、「プチ」の名前にそぐわない盛会でした。

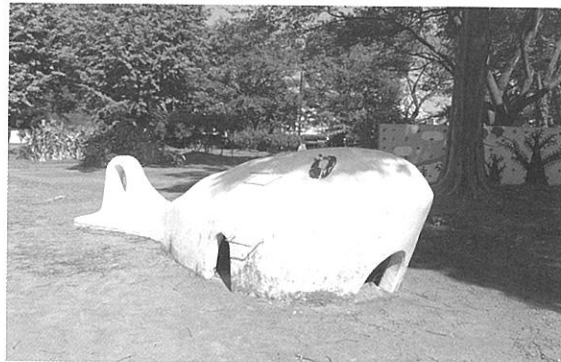
自己紹介と近況報告にはじまり、懐かしい

エピソードや思い出話、知られざる秘話の花が咲き、さらには小林先生から手作りの「えんぴつ君ストラップ」を全員にプレゼントしていただくサプライズもあり、終始和やかな雰囲気にも包まれた、楽しい同期会となりました。



なつかしの写真館

【会報十六号で紹介の謎の造形物】



▷小金井小学校校庭の東端に現在もあるコンクリート製の遊具「くじら号」です。創立八十年記念誌によると昭和四十五年頃に製作されたとあります。今なお現役。当時、公園や小学校に教育用造形物として流行したそうです。写真をよくみると製作を生徒が手伝っています。どなたか当時をご存知の方はいらっしゃいますか？



くじら号製作中

【今年のコレなんだ？】



昔は階段下にあって朝眠っていました。昭和60年頃は廊下にあったそうです。お世話になりましたね。

▽懐かしい写真・思い出の写真をお寄せください。何か新たな発見があるかもしれません。

《ぶらり同窓会》(懇親会) 報告



二〇十五年十月三十一日、小金井小学校にて、第三回「ぶらり同窓会」が開催されました。卒業以来、四十年近く母校に行っていないなかた方や、翌週の同期会の前に仲間と集まってくれた方々など、人生の節目に「ぶらり」と立ち寄っていただきました。まさにコンセプト通り、これからも同窓生の皆さんにほっこりとした気持ちになっていただけたらと思っております。会の終わりは、金子前会長による恒例の「ハラヤン・カラヤン」で見事に会を締めくくって頂きました。是非、次回もお足運びください。

平成27年度収支決算および監査報告

・平成27年度 (平成27年4月1日～平成28年3月31日)

●収入の部

(科目)	(金額)
・年度繰越金	12,082,558
・総会当日入金	105,000
・入会費	1,130,000
*H28年3月卒業生×113名	
・寄付一支援・総会参加費	888,470
・利子	2,634
収入合計	14,208,662

●支出の部

(科目)	(金額)
・会報16号印刷郵送費	1,036,906
・第3回「ぶらり同窓会」経費	146,487
・郵送費	1,674
・慶弔費	33,510
・HP維持改訂費	43,632
・次年度繰越金	12,946,453
支出合計	14,208,662

<内訳>

・会報16号・・・モノクロ印刷12p 8,000部、7,194部発送

※今期より母校卒業年次のクラス数が4クラスから3クラスに減少しておりますので、入会費が減少しております。
 ※本報告は適正であると監事より承認をいただいております。

▽『第十一回総会および懇親会』開催

- ・日 時 平成二十八年十一月五日(土)
- ・総 会 午後二時から
- ・懇親会 午後三時から
- ・場 所 附属小金井小学校食堂二階
- ・会 費 二十歳以上 二千元

(懇親会費を含みます)

二十歳未満 無料

▽ホームページ担当からのお知らせ

- ・同窓会ホームページもリニューアル中です。

(<http://www.nadeshikonokai.jp>)

新たに、各期の同窓会情報、同窓生の現在などのほか、過去の学校生活にまつわる資料、情報、エピソードなどの他、会報で紹介しきれなかった記事や写真もフォローアップ予定です。

情報は、

nadeshiko@nadeshikonokai.jp まで。

▽会報への寄稿のお願い

・皆さんと創る会報を目指しています。

クラス会・同窓の仲間の集い、母校の歴史ほか何でも。まずは先にお申し出ください。

川田 紀雄 電話(042-324-9912)

野久尾 悟 電話(03-3720-18023)

メールアドレス

nadeshikokaiho2013@gmail.com

●編集後記

「同窓会カフェ」という発想はどうだろう。ときにぶらりと立ち寄って、居合わせたメンバーと語り合う。久しぶりの同期会を前にちよつと仲間が集まってネタ集めです。先生元氣かなって覗きに来ました。若手の方が使い方を心得ている。いやいやそんなこともない。懐かしい写真や資料をお持ちになって、母校の歴史に始まって当時の時代背景、生活様式にまで話が広がっていく諸先輩方。語り合うメンバーは老若男女垣根がない。是非またお越しくください。お待ちしています。(野久尾記)

【お詫言】

昨年発行の会報十六号にて、ご寄稿いただきました内海恵子さんのお名前を誤って内海順子さんと記載してしまいました。訂正してお詫言申し上げます。



「撫子の会」会報 第17号

発行 平成28(2016)年8月
編集 野久尾 悟
印刷 神林印刷(株)

〔投稿寄稿問合せ先〕

川田 紀雄 (電:042-324-9912)
野久尾 悟 (電:03-3720-8023)

〔同窓会事務局〕

東京学芸大学附属小金井小学校内
〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1
電話:042-329-7823
ファクス:042-329-7826
撫子の会郵便振替口座:00100-8-709121
加入者名:撫子の会